

ICFの構成要素間に存在する相互作用

～アセスメントの過程～

井野紗里那 郡司華奈 今野紗起子 水越早紀

1. はじめに

私たちは、社会福祉援助技術現場実習Ⅰ（以下、実習とする）を行った。私たちのグループは、特別養護老人ホーム、障害者支援施設、複合福祉施設で実習を行ったメンバーで構成されている。

実習を振り返る中で、共通の課題としてアセスメントが不十分であったため、利用者のニーズを明確にすることができなかったという課題があがった。そこで、アセスメントについて再度復習すると、『情報収集を行い、それを分析することで、利用者のおかれている状況を把握し、どのようなニーズが生じているのかを明らかにすること』とあった。

大学の授業では、利用者のニーズとは、身体機能的状況・精神心理的状況・社会環境的状況の相互関係性のなかで生じていると学んでいた。そして、実習では個別支援計画の作成にあたり、メンバーの一人から、実習担当職員に助言をうけ、アセスメントした情報をICFにまとめてみると、自分が収集した情報が整理しやすくなったという体験があがった。そこで、ICFについて調べてみると、『健康状態』『心身機能／身体構造』『活動』『参加』『環境因子』『個人因子』の6つの項目から構成されるもので、それぞれが相互に影響しているのだと知った。ICFを活用することで、利用者の情報の相互作用を見つけ出すことが、ニーズを明確にするための手段につながると考えた。

2. 研究方法

- (1) 実習の体験を話し合う。
- (2) 話し合いをもとにテーマを決定する。
- (3) 参考文献、資料の収集をする。
- (4) 参考文献を読み、先行研究とその考察を行う。
- (5) 実習担当教員と面談を行う。
- (6) 仮事例を作成する。
- (7) 仮事例をもとに考察を行う。
- (8) 考察し今後の課題を考える。

3. 先行研究

(1) アセスメント

情報収集を行い、それを分析することで、利用者のおかれている状況を把握し、どのようなニーズが生じているのかを明らかにすること。

(参考文献：社会福祉士養成講座編集委員会『相談援助の理論と方法Ⅱ』中央法規 P39 2015年)

[図1]

情報収集→情報分析→評価

(2) アセスメントにおけるニーズの明確化

利用者のニーズは、**身体機能的状況・精神心理的状況・社会環境的状況**の相互関係性のなかで生じている。この3つの相互関係性の中でニーズが生じていることをソーシャルワーカーは理解する必要がある。

(参考文献：社会福祉士養成講座編集委員会『相談援助の理論と方法Ⅱ』中央法規 P41 2015年)

(3) ICFの構成要素

- ・『健康状態』『心身機能／身体構造』『活動』『参加』『環境因子』『個人因子』の6つの項目から構成されるもの
- ・それぞれが相互に影響しているもの

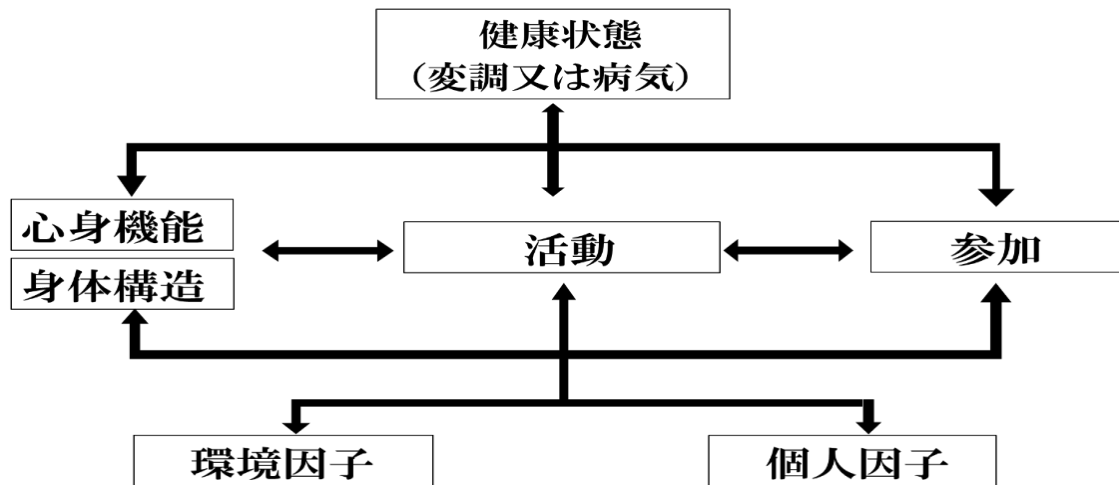
(引用文献：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所『ICF及びICF-CYの活用：試みから実践へー特別支援教育を中心にー』ジアース教育新社、2009年)

(4) 相互作用

- ・『心身機能／身体構造』『活動』『参加』という生活機能の3レベルは、それぞれが単独に存在するのではなく、相互に影響を与え合い、さらに健康状態や、『環境因子』『個人因子』の2つからなる背景因子からも影響を与え合う。
- ・一つの要素に介入するとその他のひとつまたは複数の要素を変化させる可能性がある。

(引用文献：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所『ICF及びICF-CYの活用：試みから実践へー特別支援教育を中心にー』ジアース教育新社、2009年)

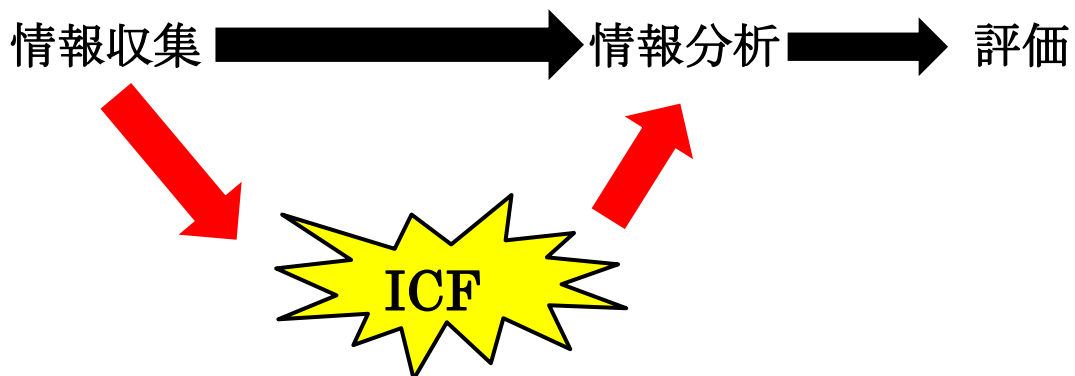
[図2] ICFの構成要素間の相互作用の図



4. 先行研究の考察

(1) アセスメントにおいてICFを活用できる可能性

[図3]



アセスメントの過程は、情報収集、分析、評価であることがわかった。この過程を繰り返し行う中で、ICFを活用することがニーズの明確化につながると考える。

(2) アセスメントの過程

情報収集	…	利用者の主訴を知る段階
情報分析	…	相互作用を見つける段階
評価	…	ニーズを明らかにする段階

(3) 私たちは、以下のアセスメントシートを作成した。ニーズの明確化に向けて、このアセスメントシートを活用して仮事例を研究していきたい。

[表1]

	状況
ADL	
健康状態	
心理	
余暇	
社会性	

5. 仮事例

【設定】

利用者A（以下Aさんとする）

- ・女性
- ・37歳
- ・知的障害、脳性小児麻痺、障害支援区分4
- ・通所生活介護サービスを利用している
- ・グループホーム入居中

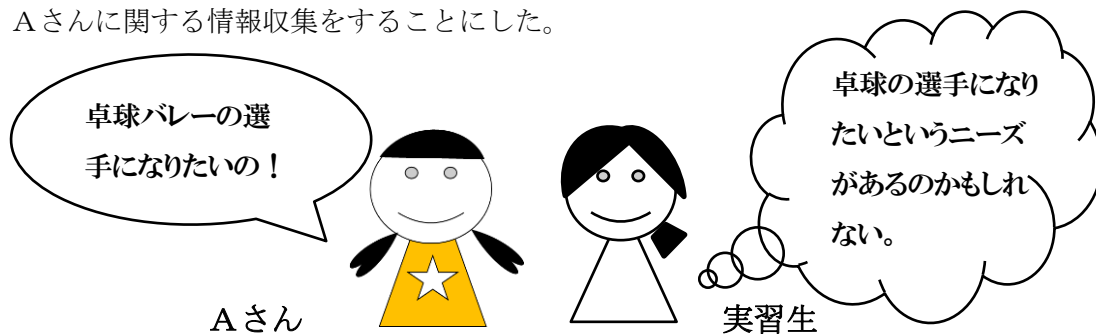
主訴：卓球バレーの選手として参加したい

実習生

- ・実習生は、1ヶ月のソーシャルワーク実習を行っており、個別支援計画の作成におけるアセスメントの最中である。

【場面1-1】情報収集

実習生は、Aさんに今後の生活について話を伺ってみたところ、Aさんは、「前から参加している卓球バレーに選手として参加してみたい」と言った。この発言から、実習生はAさんが運動することを望んでいるのだと思い、Aさんのニーズを“卓球バレーの選手になりたい”と捉えた。そして、Aさんが卓球バレーの選手になるために、実習生はAさんに関する情報収集をすることにした。



【場面1-2】 情報収集 ～アセスメントシート～

[表2] アセスメントシート

	状況
ADL	<ul style="list-style-type: none">・移動、着脱に一部介助が必要・その他はほぼ自立
健康状態	<ul style="list-style-type: none">・脳性小児麻痺・右下肢麻痺・肥満気味
心理	<ul style="list-style-type: none">・卓球バレーの選手になりたい
余暇	<ul style="list-style-type: none">・一人での運動はほとんどしない・勝負事はあまりしない
社会性	<ul style="list-style-type: none">・卓球バレーの練習や施設内のレクリエーションに参加している・グループホーム入居・環境の変化が苦手・外出の機会が少ない

【場面1-3】

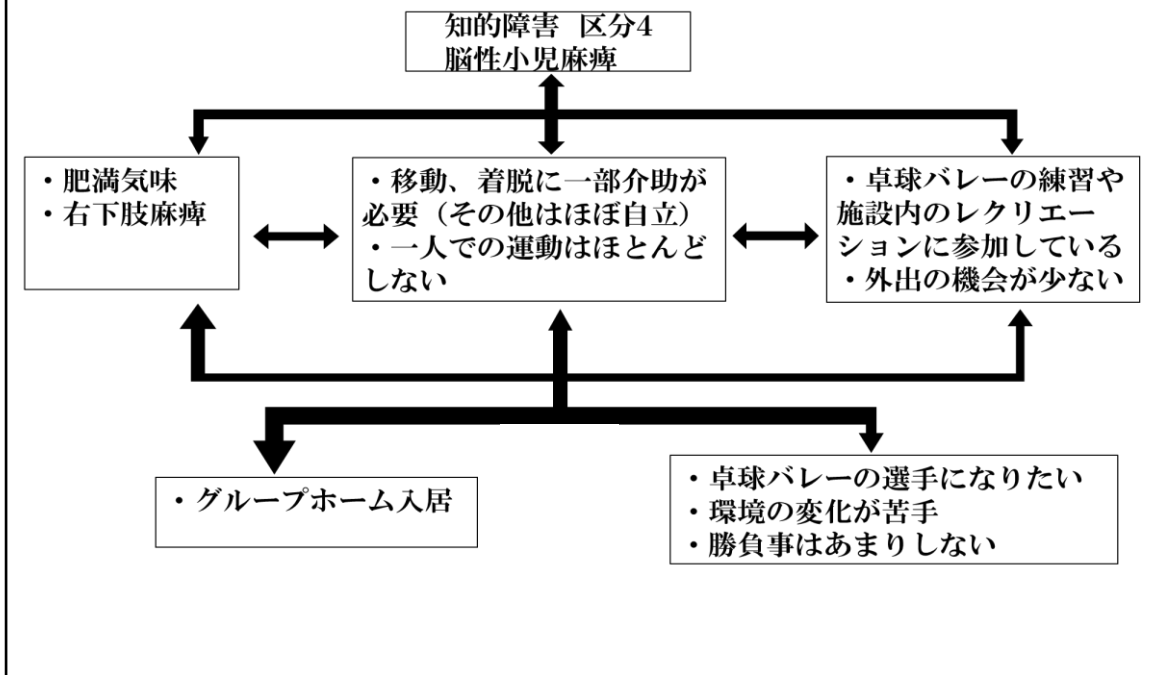
Aさんのニーズは“卓球バレーの選手になること”だと考え、情報収集に取り組んだが、一人での運動はほとんどしないこと、勝負事はあまり好まないことなどその他の情報からも、Aさんが卓球バレーの選手になるのは難しいのではないかと考えるようになった。そこで、実習生は、作成したアセスメントシートを実習担当職員に見せ、助言をもらうことにした。

【場面2】 実習担当職員からの助言

実習生は、自己の判断が妥当であるか確認するため、実習担当職員にAさんの“卓球バレーの選手になりたい”というニーズを伝え、作成したアセスメントシートを提示した。すると、実習担当職員から、「それは、Aさんの本当のニーズでしょうか。ICFの項目に当てはめてみると、情報の関係性がわかりやすくなるので、ICFを活用してもう一度よく考えてみましょう。」という助言を受けた。そこで、実習生は、“卓球バレーの選手になりたい”というニーズが妥当であるか判断するため、ICFに自分が収集したAさんの情報を当てはめてみることにした。

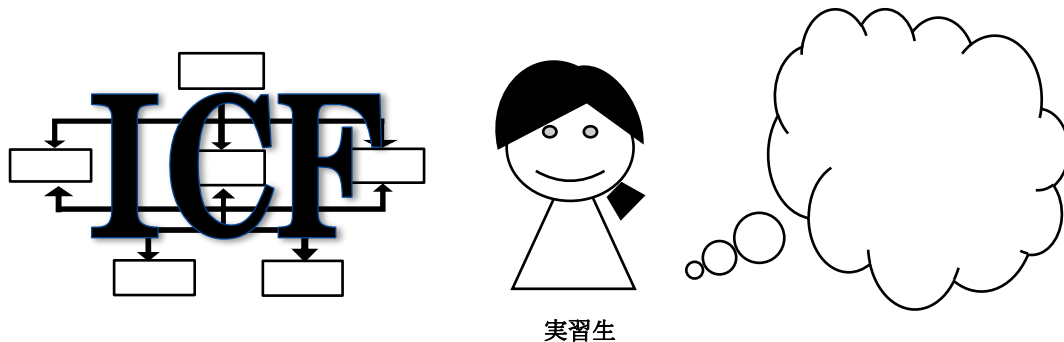
【場面3-1】情報分析 ～ICFの活用～

【図4】 AさんのICF相互作用の図①



【場面3-2】

実習生は、自分が収集したAさんの情報をICFに当てはめてみると、Aさんの障害やできないことなどの情報に目を向けることが多いことがわかった。さらに、背景因子(環境因子・個人因子)にあたる情報が少ないことがわかった。そのため、家族や多職種にAさんについて話を伺い、再度情報収集にあたることにした。



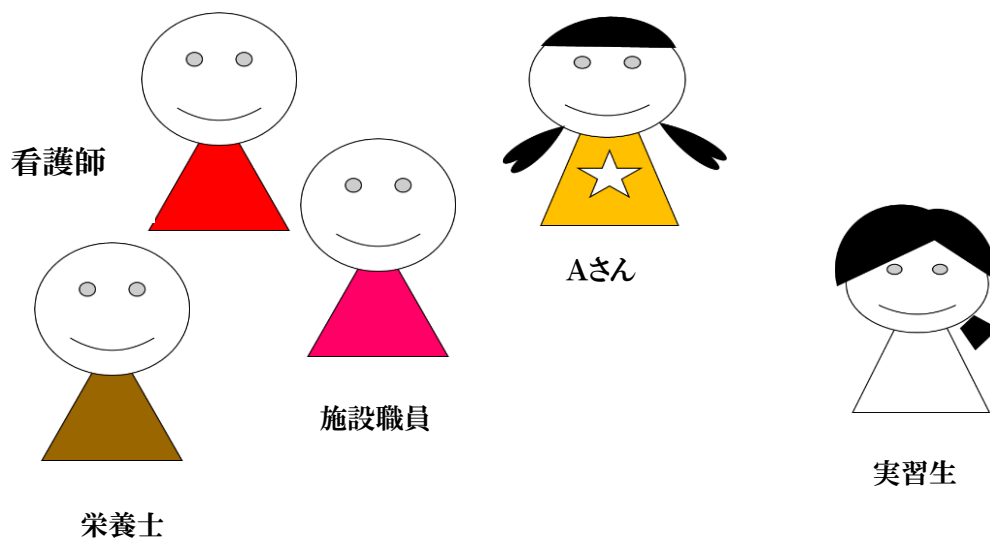
【場面4】 情報の再収集

① 実習生は、Aさんが卓球バレーをしている様子を見学したり、実際に一緒に体験することとした。卓球バレーを行う会場へ移動する際、Aさんは楽しそうであったが会場について途端、口数が少なくなり、活動にも消極的になった。その様子から、実習生は、Aさんは、卓球バレーが好きなのか、本当に選手になりたいのか疑問に思った。

② 実習生は、Aさんから得られなかった情報、アセスメントシートで不足していた情報について実習担当職員に質問することにした。さらに、家族や多職種からも情報収集しようと試みた。しかし、Aさんは家族と疎遠となっており、何年も会っていないことがわかった。

③ 生活支援員から、Aさんは散歩が好きでよく一緒に出かけることを教えてくれた。また、テレビを見ることも好きで、旅番組やニュースを見て、行きたいところややってみたいことをよく話してくれることを教えてくれた。

看護師からは、Aさんは少々肥満気味のため、栄養士と相談しながら毎食塩分制限をかけた給食の提供をしていることがわかった。

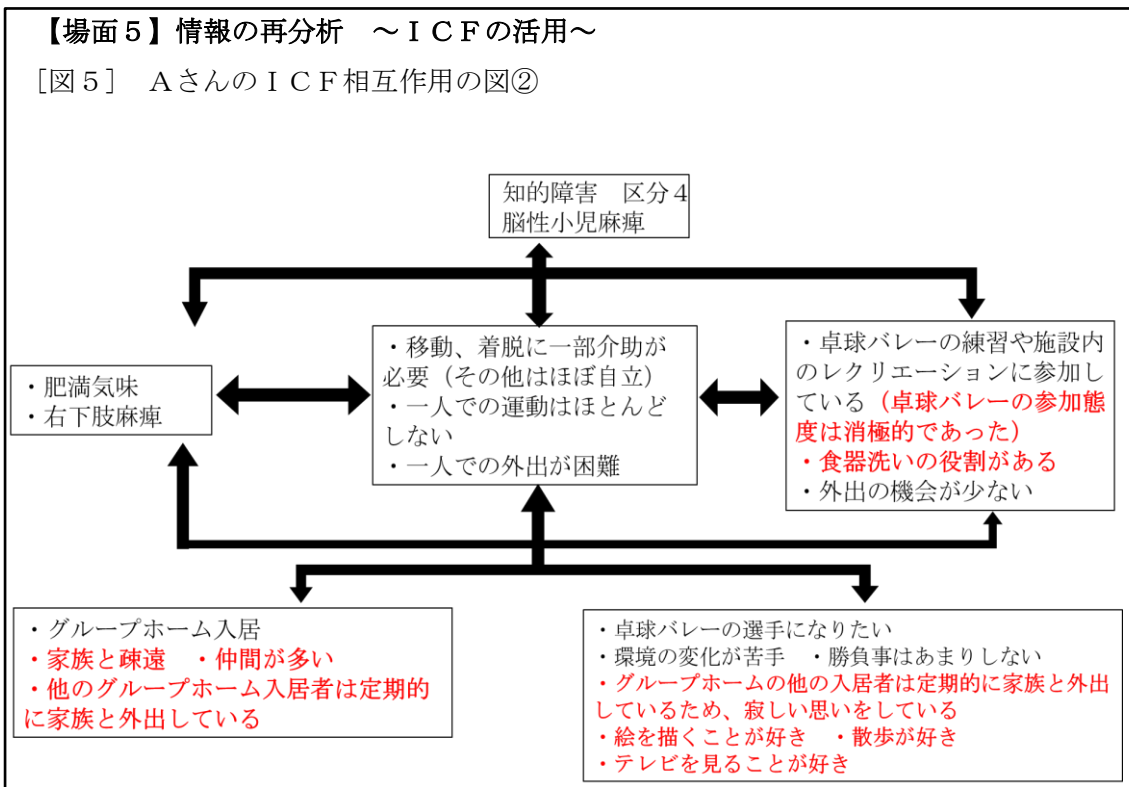


[表3] アセスメントシート

	状況	再収集した情報
ADL	<ul style="list-style-type: none"> ・移動、着脱に一部介助が必要 ・その他はほぼ自立 	
健康状態	<ul style="list-style-type: none"> ・脳性小児麻痺 ・右下肢麻痺 ・肥満気味 	
心理	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球バレーの選手になりたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループホーム入居者は、定期的に家族と外出をしているため、寂しい思いをしている
余暇	<ul style="list-style-type: none"> ・一人での運動はほとんどしない ・勝負事はあまりしない 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描くことが好き ・テレビを見るのが好き ・散歩が好き
社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球バレーの練習や施設内のレクリエーションに参加している ・グループホーム入居 ・環境の変化が苦手 ・外出の機会が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球バレーの参加態度は消極的であった ・食器洗いの役割がある ・家族と疎遠

【場面5】情報の再分析 ～ICFの活用～

[図5] AさんのICF相互作用の図②



【場面6】評価 ～要素間の相互作用～

- ① 心身機能/身体構造：右下肢麻痺 と 活動：一人での外出が困難



自分の好きなところに行きたい

- ② 参加：卓球バレーの練習や施設内のレクリエーションに参加していると
環境因子：仲間が多い と 個人因子：環境の変化が苦手



友達がたくさんほしい

- ③ 参加：グループホームの他の入居者より外出の機会が少ない と
環境因子：家族と疎遠 と 個人因子：散歩が好き（外出が好き）



楽しみを増やしたい

- ④ 参加：外出の機会が少ない と 個人因子：環境の変化が苦手

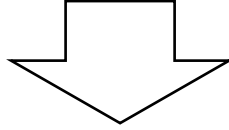


社会性を身に着けたい

- ⑤ 活動：移動、着脱に一部介助がある（その他はほぼ自立） と
参加：食器洗いの役割がある と
環境因子：グループホームに入居している



できることを増やしたい



卓球バレーの選手になることで、みんなと外出する時間が増える。

- みんなと外出する時間を増やしたい
- 交流関係を広げたい
- 社会性を身に着け、自分のレベルアップにつなげたい

ニーズの明確化

6. 総合的な考察

私たちは実習で、利用者の発言をそのままニーズとして捉えていた。また、アセスメントシートの項目を記入した後は、情報収集したことに満足してしまっていた。そのため、アセスメントシートの項目の関係性を見ることや利用者の発言の背景に着目せず、ニーズを確定しようとしていた。

この仮事例を通し、私たちはアセスメントの過程である情報収集において利用者から得た情報をICFにまとめ、情報分析を行うことで、6つの項目の相互作用を見つけ、ニーズを明らかにしていくことができるとわかった。

さらに、ICFを活用することで見つけた相互作用である利用者の情報（要素）の一方に介入することで、その他の一つ、また、複数の要素を変化させることができると理解した。

本研究を進める中で、アセスメントの過程において、ICFを活用したうえで、足りない情報を再収集したり、利用者に関わる社会資源を活用したりするために、多職種や家族と連携する必要があると考える。

将来、私たちがソーシャルワーカーとして働く際、今回の研究を生かし、利用者の情報から相互作用を見つけ、その人に合った支援をしていけるようなソーシャルワーカーになりたい。

7. おわりに

本日はお忙しい中、私たちの発表を最後まで聞いてくださり、ありがとうございました。それぞれに性格が異なる私たちのグループは、本研究を進めていくにあたり、メンバー同士の関係性の構築から始まりました。話し合いの中で、研究テーマが決定しても、ICFの奥深さ故に、共通理解が難しく、グループでの意見がまとまらずに行き詰ることが多くありました。それでも、メンバー同士、話し合いを重ねていく中で、段々と自分たちが何を研究していきたいのか明確になり、アセスメントにおけるICFの活用についての理解を深めることができました。最後まで意見がぶつかることは多々ありましたが、今となってはこのメンバーで本研究を進めることができ、本当に良かったと思っています。

本研究を進めることの難しさに直面しながらも、私たちが今日の報告会を迎えることができたのは、実習を受け入れてくれた施設職員の皆さま、利用者の皆さま、最後までたくさんご指導して下さった実習担当教員、実習助手の方、アドバイスをくれた先輩方、準備をしてくれた後輩たちのおかげです。今後は、社会福祉士の国家試験の合格に向けて勉強を進めていきたいと思えます。私たちだけの力ではここに立つことはできなかったと心から思います。本当にありがとうございました。

8. 参考文献

- ・社会福祉士養成講座編集委員会 『相談援助の理論と方法Ⅰ』 中央法規 2015年
- ・社会福祉士養成講座編集委員会 『相談援助の理論と方法Ⅱ』 中央法規 2015年
- ・社会福祉士養成講座編集委員会 『相談援助の基盤と専門職—ソーシャルワーク』 中央法規 2015年
- ・独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 『ICF及びICF-CYの活用：試みから実践へ—特別支援教育を中心に—』 ジアース教育新社 2009年
- ・黒澤貞夫 『ICFをとり入れた介護過程の展開』 株式会社 建帛社 2007年
- ・横山正博 『ソーシャルワーカーのためのチームアプローチ論』 ふくろう出版、2010年